第二章

僕ががんばってきたことに気づくまで

5.「ラストオーダーです。」を心待ちにしていたのに…。

その日、僕と青希はたくさん食べて、たくさん飲んだ。運ばれてくる料理はすごく美味しかった。不思議と僕の好きなものばかりが出てきた。青希と食べ物の趣味が合うのかな?と思い、少し浮かれた。食べ飽きたはずのイカも出てきたけど、それすらもすごく美味しく感じた。

色んな話をした。昔の話もたくさんした。ダンスの話はやめとこうとしたけど、青希が訊いてきたので「あれからやっていない」とだけ伝えると、青希はほんの少しだけ寂しそうな顔をした気がした。

義足になってしまった青希はもう踊れない。だから、すぐに別の話に切り替えようとしたけど青希はダンスの話を続けた。

「達也、めちゃめちゃ上手だったのに、なんかもったいないね。」

「…嫌味かよ。逆じゃん！　青希のおかげで勝てたんじゃん。」

「え?」

「青希、すごい技いっぱいやって、いつもワーワー言われてさ。」
「ああ、そんな時もあったけど、おれはいっぱい失敗もしてたよ。」
そう言われてみれば、そうだったっけ？…いや、思い出せない。

「達也が、いつも安定したダンスをしてくれていたから、おれが失敗してもカバーしてくれていたから勝てた時の方が多かったよ。」
…また覚えてない。というか、自分が青希の役に立てていたなんて記憶がひとつもなかった。だけど、嬉しかった。

それから、お互いの仕事の話もした。青希は老人ホームで働いているらしかった。それを聞いて、僕は大変だろうなと思った。

「…大変そうだな。」
わかった顔をしながら、そう言うと、
「なんで？　楽しいよ。」
とすかさず笑顔で返された。そして、青希は仕事の楽しさを語り続けた。

無理してんのかな?と思ったけど、あまりに楽しそうに話すので黙って聞き続けた。

僕の仕事についても青希は色々質問してきた。とは言っても、青希は既に僕の仕事について知っていて驚いた。ウェブサイト制作会社で働いていることも、営業マンだってことも知っていた。きっと高校時代の友達から聞いたんだろう。

「どんなことが楽しいの?」「なんで楽しいの?」「一番幸せだった時は?」

時に深く頷いたり、体を乗り出してきたり、メモしたり…。青希は、まるで舞台俳優のように大げさに話を聞いてくれた。…そして、それが心地よかった。

ポジティブな質問ばかりをしてくれたおかげか、あれだけ嫌だと思っていた仕事の話でも楽しく話すことができたのに驚いた。本当は仕事が好きじゃないってことも話そうとしたけど、せっかくの楽しい雰囲気を壊したくなかったのでやめておいた。

とにかく楽しかった。人と話すことがこんなに楽しいと思えたのは、いつ以来だろう…。

「ラストオーダーになります。」

店長から声をかけられて時計を見ると、いつのまにか5時間以上が経っていた。

最近は、ずっとこの「ラストオーダーです。」を心待ちにしていた。お客さんと飲んでいる時も、友達と飲んでいる時も、早く終わらないかなって時計ばかり見ていた。あんなに欲しがっていた「ラストオーダーです。」の言葉が、今日は初めて残念に聞こえる。

「楽しかったーー。」

満足そうな顔で帰る準備をしている青希のドストレートな言葉が、僕の楽しい気持ちを一層高めてくれた。

「また、行こうよ。」

だから、僕も安心して言い慣れていない言葉を口にできた。

「達也に、うちの施設のウェブサイトつくってほしいんだよね。」
去り際に青希がそう言ってくれたけど、僕はすっかりリップサービスだと思っていた。

6. サザエさんと六本木と会社が嫌い。

〝サザエさん症候群〟
日曜日の夕方から深夜に、次の日の学校や仕事のことを考えて憂鬱になったり、体調が悪くなったり、ダルくなったりすることを言うらしい。
僕は、まさに、そのサザエさん症候群だった。
でも、青希と会った翌日の日曜日は違った。カツオの鋭い発言に笑ったし、波平さんが恥ずかしがっている姿を見てかわいいなと思った。ワカメちゃんの髪型が気になり出して、横の角度と後ろの角度を見て、「へえ、こうなってるんだ。」と独り言まで言っていたくらいだ。

その高いテンションは、翌日の月曜日も続いていた。

「私、六本木、好きなんだよね。」と言う人と出くわすと、僕は、１００パーセント「合わない人だ。」と思っている。

いかにも仕事ができます風のビジネスマン…、ヒルズ族…、大声で話す奇抜な恰好をした若者、陽気に話しかけてきて無視すると舌打ちする外国人の客引き…。そういう痛い人間が幅を利かす六本木が、どうしても好きになれない。そして、そんな六本木を好きだと言う人は、間違いなく合わない。

だけど、僕自身が毎日、そういう人たちと出くわしている。

会社が六本木にあるからだ。毎朝、自宅のある十条から自分がモノのように感じるほどギューギューに詰め込まれた電車で新宿まで運ばれる。その後、電車を乗り換え、六本木に運ばれた頃には、いつも、その日1日分の体力を使い果たしたくらいクタクタになる。そういう状態で合わない人たちと出くわすとますます体力を奪われていく。

でも、今日は違った。

会社へ向かう足取りが軽い。仕事ができます風のビジネスマンや、奇抜な恰好の若者とすれ違っても、いつもみたくイライラしなかった。その代わりに、思わずスキッ

プしてしまいそうなほど、ワクワクしていた。

☆

「忘れてた…！」

出社した瞬間、さっきまでのワクワクの代わりに、ドヨーンとした気持ちが押し寄せてきた。

壁に貼り出されている大きな白い紙。

そこには、営業部全員の3か月間の営業成績が書かれている。

そうだった。今日は3か月に一度の営業成績発表の日だ…。

この8年間、僕の成績は常に営業部40人の中で30位を下回っている。幸い一度も最下位になったことはないが、一度も30位以内に入ったこともない。今回も36位に、〝鈴木達也〟と僕の名前が書かれている。

「鈴木‼　ちょっと来い！」

『やっぱり来た！』　正直、営業成績が悪いことには慣れていた。でも、どうしても

慣れないことがある。それが、この説教タイムだ。

36位以下、ワースト5は、部長の席の前に立たされる。そして、散々小言を言われるのが恒例になっている。僕よりも成績が悪かった残り4人は、既に部長の机の前に立たされてうつむいている。

その4人の横に申し訳なさそうに並んだ瞬間、部長のきつい香水の匂いが鼻について、憂鬱な気持ちが色濃くなった。

「お前ら、とにかく努力が足りない！　気持ちの問題なんだよ！」

5人に聞こえるボリュームで十分のはずなのに、部長は部屋中に響くような声で話し始めた。公開処刑の始まりだ。

「ケンタッキーのカーネル・サンダースは…。」

出た‼　この話は、今まで散々聞かされた。カーネル・サンダース、エジソン、アインシュタイン、松下幸之助…。部長は柔道部出身。根っからの体育会系だ。そのせいか、散々努力した偉人の話ばかりしてくる。おかげで偉人には詳しくなった。でも、

話を聞けば聞くほど暗い気持ちがますます増すだけだ。

『…それにしても、土曜日は楽しかったな。』

部長の説教に慣れているわけじゃなかったけど、飽きているせいか、いつのまにか土曜日のことを思い出している。

昔から青希といる時は楽しいことばっかりだった。本当によく笑っていた。担任から説教されている時に、担任の鼻毛が出ていた時は、それだけで1週間は笑えたな。

今、目の前でどなっている部長も鼻毛がコンスタントに出ている。だけど、昔みたいに笑えない。このくさい香水をつける前に鼻毛を切ればいいのに…。

「おい‼　お前‼」

部長が急に立ち上がって、胸ぐらを掴んできた。

「何ニヤついてんだよ‼　お前、全然反省してないだろ⁉」

『しまった。』笑えないと思っていたのに、いつのまにか笑ってしまっていたらしい。

「なあ！　反省してないだろ‼」

至近距離の大声に鼓膜が破れそうになる。
「ちょっと！　放してくださいよ！」
イライラし過ぎて思わずそう言ってしまった。今まで部長に意見したことなんて一度もなかった。仕事とは関係ないデブいじりをされても黙っていたくらいだ。胸ぐらを掴まれたのも、これが初めてじゃなかった。

そんな僕の初めての反抗に驚いたせいか、部長は手を放した。そして、その代わりにらまれ続けるはめになった。
悔しさがジワジワと込み上げてきた。ここには毎回立たされている。だけど、何度それを繰り返しても悔しいことは悔しいんだ。

『カーネル・サンダースは、フライドチキンのフランチャイズ契約を取るまでに１００件以上断られた。』
部長の大好きな話だ。

僕だって毎日最低10件は電話営業しているし、飛び込み営業をすることもある。断

られる数は1年、いや半年で１０００件なんてとうに超えている。
でも結果が出ない。電話は冷たく切られることがほとんど。飛び込みなんて、会ってもらえることすらほとんどない。

1週間前なんて、飛び込み先でいきなり「いらねーから帰れよ！」とどなられた。そういうことがあると、眠れないほどボロボロになる。目を閉じると、どなったやつの顔が頭に浮かんできて家で奇声を発してしまう。
もちろん、がんばりが足りないことは自分でもわかっている。営業電話をかける数も、他の人よりも少ないと思う。飛び込み営業は躊躇してしまい、30分くらい訪問先の会社の前でウロウロすることもある。体調を崩して欠席してしまうことも多い。もっとがんばれることはわかっている。でも、どうしてもがんばれないんだ…。

「これだから、運動やってなかったやつはさ…。」
沈黙を破って部長が話し始めた。
「ダンスなんてナヨナヨしたもんやってたから根性ないんだよ！」

部長の首を折ってやりたい衝動に駆られた。

部長が、歓迎会の時に無茶ブリしたせいで首を骨折して出遅れた。その負い目があったせいか、今まで部長はダンスの話に触れてこなかった。

それなのに、今日初めて触れてきた。僕がいないところではずっと言っていたのかもしれない。ふいに青希の顔が浮かんできた。そして、青希が言ってくれた言葉を思い出した。

『達也のおかげで、ずっとがんばれた…。』

次の瞬間、部長に向かって人生初の言葉を口走ってしまった。

「結果出すから、黙っててください！」